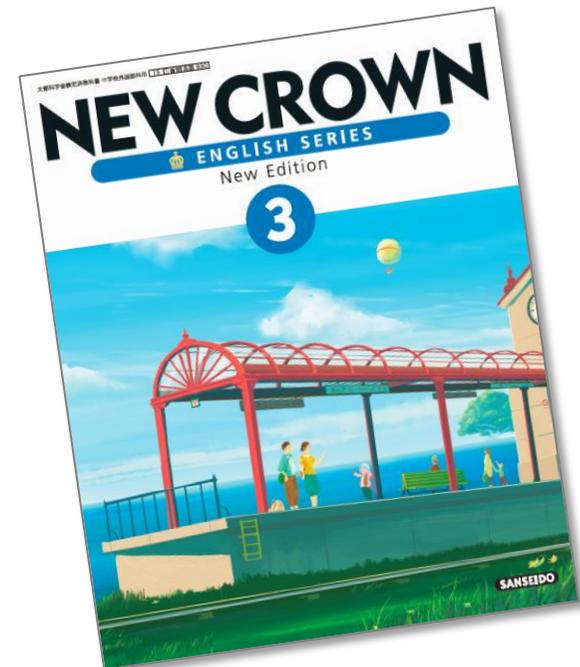
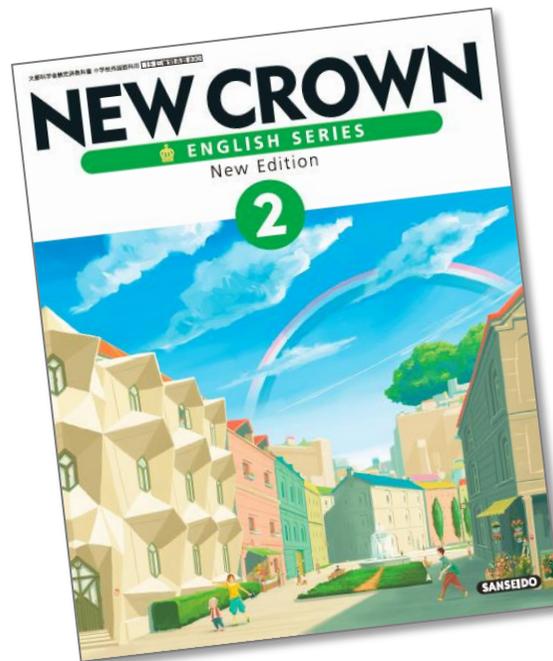
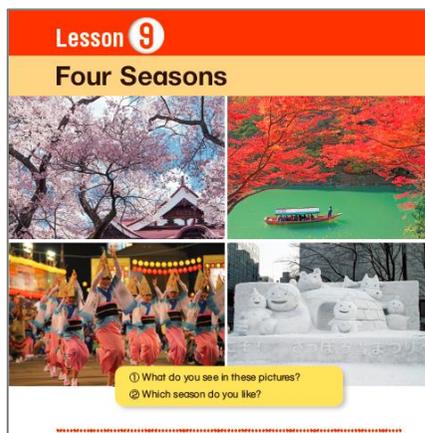


アクティブ・ラーニングでつなぐ NEW CROWN



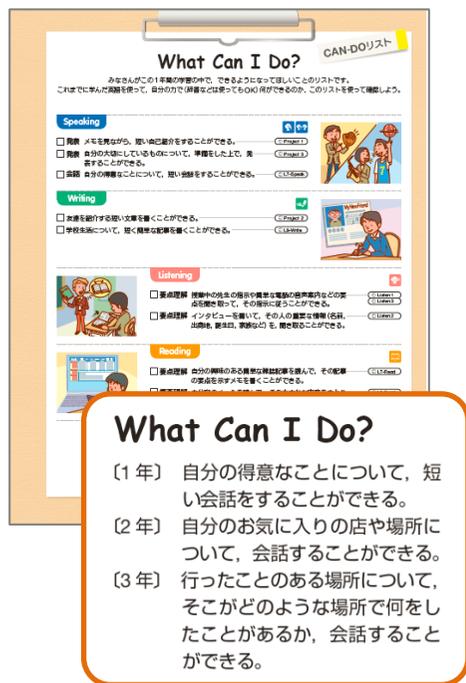
この資料は、社団法人教科書協会「教科書宣伝行動基準」に則って作成しております。

主体的に学ぶ



この課で学ぶこと

- 日本の身近な年中行事について関心を高める。
- 一般動詞の過去形を理解し、使う。
- 日本の年中行事についての物語文を読む。
- 学校生活についての記事を書く。



What Can I Do?

- 〔1年〕 自分の得意なことについて、短い会話をすることができる。
- 〔2年〕 自分の気に入りの店や場所について、会話することができる。
- 〔3年〕 行ったことのある場所について、そこがどのような場所で何をしていたことがあるか、会話することができる。

1. 主体的に学ぶこと



松沢 伸二
(新潟大学)

現行の教育課程は、「主体的に学習に取り組む態度」(学校教育法)を養い、「自主的、自発的な学習」(中学校学習指導要領総則)を促す指導を求めている。そしてその指導では、「生徒の興味・関心」を生かした「基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習」や「体験的な学習」を重視せよとしている(同総則)。

こうした問題解決的・体験的な学習は、「アクティブ・ラーニング」とも言われる。この言葉は1990年代の米国の大学での理工系教育の改善に使われたものだが、「能動的学修」の訳語とともに、日本の大学教育に取り入れられるようになった。さらに「アクティブ・ラーニング」は、文部科学大臣の中教審への諮問(平成26年11月20日)で、「課題の発見と解決に向けて主体的・協動的に学ぶ学習」と言及されてから、初等中等教育にも広まっている。

2. 主体的に学ぶ態度の育成：活動

これまでの研究で、学習者の主体的に学ぶ態度は、「見通しを立てる→活動に取り組む→学習を振り返る」と進める指導で育成できることが明らかになっている。この指導モデルのポイントの1つは「活動」にある。「タスク」とも呼ぶこの活動は、新しく学んだ語彙・文法・音声の知識・技能や題材の理解を活用して、「生徒の興味・関心」を生かした「問題解決的」で「体験的」な学習に取り組ませる活動である。それは一定期間の学習の中心的な到達目標になる活動で、「核となるパフォーマンス課題」(core performance task)と呼ばれる性質を持つ。

もう1つのポイントは「活動」に成功させることである。生徒は「核となるパフォーマンス課題」で、複数パラグラフから成るまとまりのある文章を書いたり、よく練習し、デリバリーに注意しながら発話したりすることが求められる。そこで級友との協働学習を組み込む。ワークシートにスモール・ステップの足場がけをして、どの生徒もタスクに成功するように導く。

3. 主体的に学ぶ態度の育成：見通し・振り返り

新しいNEW CROWNでも、生徒が主体的に学習できるよう、「見通しを立てる→活動に取り組む→学習を振り返る」というプロセスに沿う構成になっている。まずレッスンの「とびら」の「この課で学ぶこと」で、単元の学習の見通しを立てる。ここで「核となるパフォーマンス課題」を説明し、生徒の学習意欲を高めたい。次のGETで「習得の活動」に、続くUSEで「活用の活動」に取り組む。そして最後の「文法のまとめ」では本課で学びの振り返りをする。

主体的に学ぶ態度の育成には、1授業時間ごとの見通しと振り返りも重要である。GETの左右のページを各1時間で指導する際は、授業の開始時に本時の目標と流れを板書で示して、生徒が主体的に取り組むように導き、授業終了時に振り返りカードに自己評価を記入させるなどして、自分の学習に責任を持つ態度を育成する。

学期や年間という長いスパンの英語学習について見通し・振り返りをさせるには、教科書の巻末の「What Can I Do?」を活用する。例えば1年生には「学校生活について、短く簡単な記事を書くことができる」とある。到達目標を事前に確認して見通しを持ったり、3学期に振り返ってチェックしたりすることで、生徒は自信を深め、主体的な学習態度を身につける。

これまで同様に、コミュニケーション・アプローチを踏まえた教科書で、その構成に沿って指導すれば、「アクティブ・ラーニング」は自ずと実現されると言える。

主体的に学ぶ

Lesson 9 文法のまとめ

過去形(一般動詞)

過去形(一般動詞)は、過去のある時間について言うときに、動詞を「過去形」にして表します。

Amy **played** basketball last Sunday.
Amy **went** to Hiroshima last year.

Did Amy **play** basketball last Sunday?
— Yes, she **did**. / No, she **did not**.

Amy **did not play** basketball last Sunday.

動詞の過去形

動詞には、その過去形が ed で終わる(閉鎖動詞)と、went (goの過去形)のように形が変わる(不規則動詞)があります。

過去形の表

① ed をつける play → played (開) cook → cooked (開) want → wanted (開)
② ed をつける use → used (開)
③ 動詞が不完全なとき、y をつけて ed をつける study → studied (開)
④ 動詞が不完全なとき、s をつけて ed をつける sleep → slept (閉)

不規則動詞の過去形

go → went say → said have → had see → saw

現在形から過去形

① I play baseball.
② I played baseball yesterday.

③ search 見直しとつづき

次の単語の過去形を書いて書きましょう。そして、つづきの単語のルールを照らし合わせよう。

1. look 2. fix 3. use 4. enjoy 5. play
6. stop 7. study 8. work 9. wash 10. visit

文法のまとめ

その課で学んだ文法をふり返ります。授業でも家庭学習でも活用できるよう、ポイントを簡潔にまとめています。

Review 時制

これまで出てきた、現在・過去・未来を表す時制を整理しましょう。

① 現在形「～します」

I play tennis.
現在 過去 未来

② 現在進行形「～しています」

I am playing tennis now.
現在 過去 未来

③ 過去形「～しました」

I played tennis three days ago.
過去 現在 未来

④ 過去進行形「～していました」

I was playing tennis then.
過去 現在 未来

⑤ 現在完了形

I have been in bed for four days.
現在 過去 未来

I have finished lunch.
現在 過去 未来

I have been to Kyoto twice.
現在 過去 未来

⑥ 未来を表す表現

I am going to play the piano at the party tomorrow.
現在 明日

Jun will be a pianist in the future.
現在 未来

Review

レッスン、学年を超えて、関連する文法事項を横断的に整理します。ビジュアルな提示で、英語のしくみの理解を助けます。

絵でわかる英語のしくみ

1. 動詞と目的語

英語の動詞は、目的語が必要な動詞と、不要な動詞があります。

目的語が必要な動詞(他動詞)

動詞のすぐあとに、その行為を受ける(～される)人やものを表す名詞(目的語)が入ります。

Yuko takes a bus.
ユキコはバスに乗る。

動詞の後ろに目的語を入れるのがポイント。必ず確認しよう。

目的語が不要な動詞(自動詞)

動詞のあとに、人やものを表す名詞(目的語)は必要ありません。

Everyone smiles.
みんなが笑顔になる。

She smiled at me. など
動詞と also(代名詞)でつづけることもあるよ。

付録

横断的に文法を整理してあるので、英語の発想やことばをイメージで振り返り、理解することができます。



竹内 理 (関西大学)

文法学習と主体的学習

文法事項の確実な定着は、4 技能を統合したコミュニケーション活動を円滑に進める上できわめて重要です。また、小学校で体験的に学んだものを整理し、発展させていくためにも必要不可欠といえます。しかし、文法をルールとして教え、その知識を定着させるだけでは、これからの時代の英語教育としては不十分です。生徒たちを主体的(アクティブ)に学習に関わらせて、ルールをコミュニケーションの中で活用させ、使えるように定着をはかっていきたいものです。

「主体的(アクティブ)」とは、実際に使う、意見を出しあい考える、わかりやすくまとめる、別の場面に応用する、理解した内容を教えあうなど、学習者が活動の主体となり、受け身ではない学習を進めることを意味します。指導要領でいうところの、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と、思考・判断・発信の要素を具現化したもので、主体的に学ぶことで、学習の定着度は何倍も増すとされています。

では、文法を学ぶ場合、主体的(アクティブ)学習をどのように取り入れていけばよいでしょうか。NEW CROWN では、各 Lesson の終わりに「文法のまとめ」を組み込んでいます。これを、ペア(グループ)ワークを利用して、GET や USE で使った文を参考にさせながら、生徒達に自らの力でルールを整理させていくというのはどうでしょうか。その後、「文法のまとめ」を参照しながら改めて確認させ、さらに理解したものを他者に対して説明(質問)しあうような活動を取り入れることで、定着度は格段に増すものと思われます。

また「Review」「絵でわかる英語のしくみ」を利用する際も、生徒にそれまでの学習を振り返らせ、自分版の「Review」「絵でわかる英語のしくみ」を作らせるという活動が考えられます。その際、前述の「文法のまとめ」と同様、ペア(グループ)ワークなどの協働が重要となります。また、教員の発問による誘導も必須でしょう。加えて、単なるまとめの作業に終始しないよう、文法事項を使ったコミュニケーション活動を取り入れていくことも大切です。

「(自分が)教わったようにしか教えられない」とよく言われますが、これでは新しい時代の英語教育を切り拓くことはできません。文法学習の中にも、生徒たちを主体的に関与させるような学びを取り入れ、新たな学びのスタイルをアクティブに作り出していきたいと思います。

主体的・協働的に学ぶ

Drill ターゲットの文法事項を使った英文を、聞いたり、くり返し言ったり、書いたりして、徹底的に反復練習をします。

Practice 簡単な文脈を使った4技能の活動を通して、文法事項や語句・表現などを定着させます。

Listen …メインキャラクターのサイドストーリーを聞く

Speak …Word Bankの語彙を活用して自分のことについて話す

Write …2 Speakで話した内容をまとめて書く



樫葉 みつ子
(広島大学)

1. 文法学習におけるアクティブ・ラーニング

1つの課がGETとUSEのパートで構成され、文法を導入し練習をさせるGETから、文法を活用させるUSEへと発展しているということが、NEW CROWNの大きな長である。GETのパートでは、文法の意味と形式だけではなく、どのような場面でどういう働きのために文法を使うのかを理解でき、活用につなげられるよう、本文と言語活動の内容が工夫されている。さらに、ヒントの語彙が示されているため、文法を使う練習を生徒同士に取り組みやすい。これらの長や工夫を生かしたGETのパートのアクティブ・ラーニングの例を紹介する。

2. GETのパートの協働的な学びの過程 (Book1, Lesson 8 GET Part 1 を例に)

- (1) 本文の場面と文法を知る
 - ① 絵を見ながら、教師による本課の場面や、絵の中の人物の動きなどの説明を聞く。
 - ② 本文の音声を聞き、教師からの発問に答えて、あらましを理解する。
- (2) 基本本文による文法の理解とDrillによる練習
 - ① 文法の説明を聞き、わかったことや疑問点をペアで説明し合うなどして、理解を深める。
 - ② 1 Listen & Choose, 2 Listen / Repeat / Say, 3 Writeの順に練習する。
- (3) Practiceによる練習
 - ① 1 Listenでは、誰のことを説明しているかを聞き取る。
 - ② 2 Speakの活動のヒントとWord Bankの語句を知り、発音練習をする。
 - ③ 2 Speakでは、Word Bankの語句などを手がかりに、ペアで教科書の中から絵を選んで説明したり、どの絵についての説明かを当てたりして、発展的な練習を行う。
 - ④ 3 Writeでは、発話した英文を書く。ペアで教え合ったり、確認し合ったりする。
- (4) 本文の内容理解と音読練習
 - ① 本文中の語彙の音声・意味・使い方を知り、発音練習をする。
 - ② 本文を黙読して、発問に答えて細部を理解する。
 - ③ 挿し絵を説明することを目標に、内容や表現に気をつけながらペアで音読練習をする。
- (5) 本文の挿し絵の説明

本文を見ずに、挿し絵の人物の動きを説明すると、発話の内容は本文とほぼ同じになる。これは、本文の意味内容や現在進行形を理解した上で、絵の説明として行われる発表であるため、GET Part 1での学習の成果が表わされたものとなる。

3. ペアやグループによるアクティブ・ラーニング

教師からの一方的な説明や、一斉指導による形式操作の練習が多くなりがちな文法学習を主体的・協働的なものにするために、ペアやグループで学習や練習をさせるようにしたものが本稿での指導例である。コミュニケーション活動をペアやグループで行わせることは一般的であるが、このような基礎的な知識や技能の習得を目標とした授業でも、学習をできるだけ生徒に委ねることで、学習は活性化し知識や技能の定着を促進することができる。

※紙幅の都合上、「目標と授業構成」「具体的な指導例」の詳細を紹介できませんでした。詳細は、TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 Vol. 2を参照ください。

協働的に学ぶ

USE—Write
学校生活について記事を書こう
 ※1年間の学校生活の中で印象深かったできごとを、ウェブサイトの配信中に掲載している。海外の中学生に紹介しよう。

Step 1 できごとを選択
 校外学習

Step 2 日本語でメモを作る
 日本語のメモから構想を並び、英語でメモを作る

Step 3 英語のメモをもとに、文章を書き、タイトルと書きをつける

Field Trip to Kamakura
 Kato Ken
 Our school has two field trips every year. We visited Kamakura in November. We saw a big Buddha. We studied the history of the city at the museum. We enjoyed Kamakura very much.
 (by Ken)

Idea Box
 ① one-day camp (1日だけのキャンプ) sports day (運動会) school festival (文化祭)
 ② cook curry (カレーを作る) win the first prize (優勝する) make friends with (～と友達になる) have a good time (楽しむ)

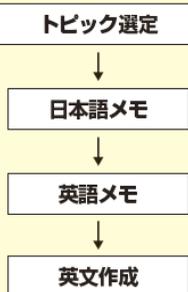
Tips for Writing
 ※構文の欄に当てはめてできごとを組み合わせるとわかりやすい。
 校外学習の行程
 11:00 大仏 見学
 12:00 昼食(サンドイッチ)
 13:00 学校帰り
 I saw a big Buddha. (11:00) I had sandwiches for lunch. (12:00) I visited some temples and shrines after lunch. (13:00)

文章作成のプロセスを理解した後、クラスやグループで書く練習をし、最後に自分の力で書きます。

「見える化」

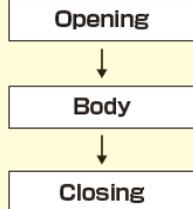
書く手順

4つのステップで、モデル文の作成プロセスや文章構成を理解します。



文章の構造

典型的な英語の文章構造に繰り返し触れ、型を身につけます。



工藤 洋路
(玉川大学)

1. 頭のなかもアクティブに

アクティブ・ラーニングでは、「主体的」および「協働的」に学ぶことにフォーカスが当てられるが、これは、単に、ペアワークやグループワークを授業に取り入れればよいということではない。友だち同士で話をしていたとしても、目的や見通しもなく話し続けていれば、それはアクティブな状態とは言えない。アクティブ・ラーニングで大切なことは、頭の中もアクティブな状態であるということである。例えば、「今書いている英語は最終的にはウェブサイトに掲載するものだよ。だから、どんな人が読んでも分かるように説明しようよ。僕はこう書いてみたけど、君はどう？」というように、頭の中で描いた見通しを踏まえて、友だちとやり取りできるということである。

2. NEW CROWN の USE Write を使ったアクティブ・ラーニング

USE Write では、最終的に誰に向けて何を書くかの指示がある。この設定を、活動中、意識させ続けることが大切である。まず、左ページでは、この課題を別の人が行った（理想的な）やり方を順に確かめるという段階が設けられている。最初から主体的に活動に取り組むことはなかなか難しいため、まずはこのステップを踏み、参考にしながら、右ページで、自力で、つまり主体的に課題に取り組む。「自力」というのは、ここでは「先生の強いサポートがない」という意味であり、友だち同士で協力し合うことも推奨されている。「グループで協力して」という指示があるが、重要なことは単に話し合うのではなく、最終的なゴールに向けて話し合うということである。従って、グループの中で、議論している内容がトピックから外れていないかをチェックする役割を作ってもよい。その際 “We’re off the track.” などの表現を教えて使わせたりすることで、生徒たち自身でゴールに向かって主体的に進ませることができる。

3. アクティブ・ラーニングが向かうべき方向

USE Write はステップが細かく設定されており、順に行うことで活動に取り組みやすくしている。ただし、現実の言語使用の世界（あるいは試験などの機会）においては、ステップは提示されない。そこで、この USE Write では、課題に取り組みながら、辿るべきステップ自体も学べるように工夫がされている。書くためのプロセスも学ぶことで、現実場面が必要となる真の主体性を学ぶことが可能になる。

課題を解決する

Project 3

大切なものを紹介しよう

単語や言葉を覚えながら、あなたにとって大切なものを、Show & Tellで紹介しよう。

1 Think これは誰が発表の準備作りのために作ったアイデアマップです。発表の発表を聞いて、実際に誰がShow & Tellで話したことにチェックしよう。

2 Think あなたが大切にしているものを1つ選んで、あなた自身のアイデアマップを作ろう。

★ ()や□に入るときの参考にしよう。
(種類、色、形、大きさ、性格、性質、性別、名前、好きなこと、できること、手に入れた経緯、感じたこと)

[聞き]

3 Think 大切なものについて、友達と英語でインタビューしよう。

英語の大切なもの	どんなものか・どうして大切なのか

Idea Box

インタビュー
 A: What is important to you?
 B: My camera.
 A: Why?
 B: Because my grandfather gave it to me.
 A: Nice. When did you get it?
 B: Two years ago.

質問
 What do you treasure? 何を大切にしていますか。
 How many times ~? 何回～ですか。
 How often ~? どのくらいの間隔で～ですか。
形容・形容詞
 cute かわい cool かっこいい beautiful 美しい
 nice すてきな old 古い new 新しい

4 Write 大切なものを紹介する Show & Tellの原稿を書こう。

Opening

●あいさつ
●紹介するもの

Body

●どんなものか
●どうして大切なのか

Closing

●まとめ
●あいさつ

Hello, everyone.
 This is _____.

 Thank you.

5 Think あなたにとって大切なものをShow & Tellで紹介しよう。

① 本題の発表を聞いて、わかったことをメモしよう。わからなかったことは質問してみよう。

学年に3回、学んだことの集大成としての表現活動を設定。複数の技能を統合的に駆使して、課題に取り組みます。

3年間で バランスのとれた テーマ設定

自分 自分以外の人 ものや場所など

1年

- Project 1 自己紹介をしよう
- Project 2 友達にインタビューをしよう
- Project 3 大切なものを紹介しよう

2年

- Project 1 有名人を紹介をしよう
- Project 2 自分の夢を紹介しよう
- Project 3 自分の町を紹介しよう

3年

- Project 1 先生にインタビューをしよう
- Project 2 日本文化を紹介しよう
- Project 3 ディスカッションをしよう



今井 裕之
(関西大学)

1. プロジェクトで課題解決の「プロセス」を学ぶ

アクティブ・ラーニングでは、能動的に読み、書き、仲間と討論やロールプレイすることで、思考・判断・表現を重ね、知識・技能・情意すべての面で成長する「学習のプロセス」が重要である。NEW CROWN のプロジェクトは、アクティブ・ラーニング、協働学習、課題解決学習の原理を踏まえた学習プロセスを明示することで、教師と生徒が活動の見通しを共有できるよう配慮している。

2. プロジェクト学習のプロセス

Think - Pair - Share (個人で考え、他者と交流し、共有・発表する) 活動は、アクティブ・ラーニングの活動の典型例だが、NEW CROWN のプロジェクトも、

- ① 課題について考える
- ② 仲間と考えを共有し改善する
- ③ 考えを練り直し、共有(発表)する

というプロセスを採用している。ただし、Thinkの前に、そのきっかけになる活動(他者のスピーチを聞いてメモを取るなど)を加え、より自然な言語使用に近づけるとともに、学習用のモデルとともに、思考の素材(Food for Thought)も提供しているので、Feed - Think - Pair - Shareの段階的構成となっている。また、一連の活動の途中・最後に学習のプロセスの「振り返り」(review, recapitulation, reflection)を加え、活動に没頭する間には気づかなかったことを意識化することもアクティブ・ラーニングのような活動的・経験的学習には重要である。

3. アクティブ・ラーニングの「主体性」

学習者が自ら(みずから)積極的に課題に取り組むことを教師が期待してしまえば、学習活動は機能しない。学習者たちが自ら(おのずから)参加する思考・判断・表現の場と時間を創るのが教師の役割・醍醐味だと思う。そのような場と時間を創るため、プロジェクトは、テーマ・トピック、発表スタイル、既習文法や語彙知識等多様な要素を踏まえた段階的な課題解決プロセスを提示した。また3年間の成長を見通せるよう9回のプロジェクトの構成やバランスも考慮しているので、先生がたの評価をぜひ請いたい。

協働作業で気づき、発見する

① 発音とつづり Phonics

① 母音字と子音字
アルファベットの中で、a, e, i, o, u は「母音字」、それ以外の文字は「子音字」と呼ばれます。

A a B b C c D d E e F f G g
H h I i J j
O o P p Q q
V v W w X x

③ 子音字の読み方

1. (1) 下の単語を、声に出して読んでみよう。
(2) 次に最初の文字のみに注目しながら、残りの音に注意して読んでみよう。
気づいたことをペアで話し合ってみよう。

Paul  ball 

② 母音字の2つの読み方

2. (1) 下の [] 内の単語を、**■** の a, e, i, o, u の発音に注意しながら、表のそれぞれの () に書き入れよう。
(2) 教科書の中から、書き入れた単語の母音字と同じ発音のものを探して、右側の () に書き入れよう。
(3) 書き入れた単語を、文字と発音に注意しながら読んでみよう。

[hand face / Japanese tennis / five six / fox home / music hungry]

	アルファベットの名前と同じ発音	アルファベットの名前ではない発音
A a () ()	() ()	() ()
E e () ()	() ()	() ()
I i () ()	() ()	() ()
O o () ()	() ()	() ()
U u () ()	() ()	() ()



田邊 祐司
(専修大学)

1. NEW CROWN は「アクティブ・ラーニング」にも対応

「新学習指導要領」で注目を集めているのが「アクティブ・ラーニング」(能動的学修)という手法です。でも心配ご無用。アクティブ・ラーニングは教師による一方的な講義形式の教育ではなく、学修者の主体的・能動的な学修への参加を取り入れた教え方・学び方の総称だからです。これはもともと2012年度中教審答申で、一方通行的な講義が多い大学教育に風穴を開けるものとして提案されたものですが、NEW CROWN で授業を進めておられる先生方には恐れるに足りません。

2. 音声指導・学習におけるアクティブ・ラーニング

NEW CROWN の Sounds では、アクティブ・ラーニングの手法を平成18年度版から少しずつ盛り込み、学習者主体の協働作業や気づき・発見というコンセプトに基づいた音声指導・学習法を導入しています。もちろん新しい NEW CROWN にも継承されています。

1年生の「発音とつづり Phonics」では、所与の単語を「アルファベットの名前と同じ発音」/「アルファベットの名前ではない発音」にグループ分けするというタスクが設けてあります。これをペアで協働作業を通して、こなすことで、母音字の読み方が2通りあることに気づくように配慮しています。

Lesson 4 の Sounds では、母音字の読み方の背後にあるルールを協働的・体験的手法で学べるようにしています。ここでは、「単語の真ん中に a, e, i, o, u が来るときにはつづり字(フォニックス)読みになる」というルールへの気づきを起こすことを主眼にしています。

英語らしい音への気づきを生む Sounds でも、listen-and-repeat だけではなく、能動的に思考をめぐらせるタスクを潜ませています。音変化が課題のこのセクションでは、look at の/k/の後に母音(ここでは弱母音の ə)が来ると自然にリンクし、その方が発音しやすくなりリズムも生まれ、英語らしい音になることを協働作業を通して体感できるようにしています。

3. NEW CROWN で学びを深く、脳に刻む

このように、単に「これはこうなのだから、そのルールを覚えなさい」的な記述ではなく、「協働作業を通して、気づき・発見する」というアクティブ・ラーニングのコンセプトに基づいた生徒の認知力に訴える仕掛けを施しています。

① 発音とつづり Phonics

母音字と子音字とそれぞれの発音の関係などについて気づきを与えたり、l と r など、英語特有の音について意識させたりします。

Sounds 英語らしい音

次の英文を聞いて、強く読まれている単語を○で囲もう。

1. Thank you for calling. 2. Pick your pizza.

a	e	i	o	u
cat	ten	this	fox	hungry
()	()	()	()	()

Sounds 発音とつづり

表中の太字の文字の読み方が同じ単語を下の [] の中から選んで() に書き入れ、読んでみよう。そして、つづりと発音のルールについて話し合おう。

[six hot bag but bed]

② Sounds

「発音とつづり」では、単音レベルの発音について、つづりとの関係を意識しながら練習します。「英語らしい音」では、リズム、イントネーション、リエゾン、音の脱落などを扱っています。

実践

USE Read をジグソー法で読む

The screenshot shows a textbook page titled "USE Read The Ogasawara Islands". It includes a map of the islands, a photo of a sea turtle, and several paragraphs of English text. The page is divided into sections for "Words", "Notes", and "Check".



山本 崇雄 (都立両国高等学校)

1. 生徒がアクティブに主体的に学ぶために

アクティブ・ラーニングは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、生徒が主体的、能動的に学ぶことを指す。本稿では、典型的な手法であるジグソー法を使って、アクティブ・ラーニングを授業に取り入れる方法を述べていきたい。

2. USE Read をジグソー法で読む

まず、教科書本文を4つに切ったものをそれぞれ教室の四隅に貼る。次に4人グループを作り、それぞれが1つずつ担当し、貼られた本文を読み、ワークシートを完成させる。ただし、読みに行く際は、ワークシートは机の上に置いたままとし、必ず戻ってから書く。また、何度読みに行ってもよいが、必ず暗記し、メモも取ってはいけない。

ワークシートは、()には1語、_には複数の語を入れる穴埋め形式になっている。()や_は、読解のキーになる語句を中心に選ぶことで、読みに行く際はそれらに集中させることができる。キーになる語句を何度も読み、意味を考え、書き写すという作業が、あとで英文全体を通して読むときに理解の助けになる。

最初から読みの活動に入ることに抵抗がある生徒もいるだろう。その場合は、読みの活動に入る前に、教科書の写真やイラストだけを見せ、そこから本文内容を想像させたり、キーワードを書き出させたりして、グループで情報をシェアさせるとよい。一方、得意な生徒には複数の英文を読みに行くよう指示すれば、段階に応じた指導も可能になる。

3. アクティブ・ラーニングは人間関係も育てる

ジグソー法を使うことにより、長い文章を分担し、読む量を減らすことで、苦手な生徒も取り組みやすくなる。また、しっかり読まないグループのメンバーに伝えられないので、「誰かのために読む」というモチベーションになる。情報を仲間から得たときは必ず“Thank you.”と言うよう促し、お互いの存在意義を高めさせるとよい。学校生活の中で「ありがとう」を言ったり、言われたりする場面は意外に少ない。授業の中で複数回ペアを替え、何度もいろいろな人に感謝することが、クラスの間人間関係を育てていく。英語の4技能を育てるだけでなく、大きなおまけもついてくるのが、アクティブ・ラーニングの素晴らしい点である。

The diagram illustrates the jigsaw reading process. It shows four student illustrations (two girls and two boys) pointing to different parts of the worksheet. The worksheet contains the following text:

(本文2) ()に英語を入れよう。

1段落 The Ogasawara Island became a _____ in (). _____ visit our islands () year. They swim with () and (). They enjoy ...

2段落 We, the people of ...

(本文3) Turtles come to the beach and lay eggs. It is a beautiful event. People sometimes take pictures. The turtles are afraid of the flash. They don't lay eggs. They hurry across the beach and go into the sea. If this continues, the turtles will not come back.

(本文4) We live in balance with nature. We hope that our visitors will understand this. Then turtles will _____ with us and our children.

ワークシート